

令和6年度 公立鳥取環境大学
一般選抜後期日程 試験問題

小 論 文
(経営学部 90分)

(注意事項)

1. 試験開始の指示があるまで問題を開けてはいけません。
2. 問題冊子は3ページ、解答用紙は2枚です。
3. すべての解答用紙の所定欄に氏名、受験番号を記入しなさい。
4. 解答用紙は横書きです。
5. 試験終了後、問題冊子及び下書き用紙は持ち帰りなさい。

以下の文章は吉永明弘著「はじめて学ぶ環境倫理」から抜粋(出題に際して、原文を一部省略および改変)したものである。これを読み、続く問に答えなさい。

倫理学の大きなテーマは「正義」(justice)です。ニュースなどで「アメリカの正義 vs アラブの正義」という言い方がされることもありますが、倫理学では、正義という言葉がこのような意味で用いることはほとんどありません。むしろこれらは「大義」(cause)と呼ぶべきものでしょう。

では正義とは何なのでしょう。倫理学でいう正義は、「公平性」に関わるものです。裁判官が公平な判決を下すことや、公務員が市民を差別しないことが、正義にかなったこととされるのです。倫理学では特に「分配の正義」に焦点を当てています。ここでは分配をめぐる公平性が問題になります。

また環境倫理学には「環境正義」という言葉がありますが、それは環境に関する人々の公平性を問うものであり、もっと言えば環境に関する不公平や差別の是正を目指すことを指します。アメリカでは産業廃棄物の処分場がマイノリティの居住地に集中的につくられていることが環境不正義にあたるとして批判されています。日本であれば、原子力発電所が(A)に集中している状態は環境正義に反しているといえます。

このような意味で正義が使われているのであれば、正義という言葉で通していきたいのですが、一般には正義はもっと広い意味で使われていますので、以下では「公平性」という言葉を使います。

さて、倫理学の研究対象である「分配」の公平性は、ごく身近な問題でもあります。たとえば私が旅行から帰って来て、学生のたまり場となっている部屋に向かいます。そこでお土産だと言って、10個入りのクッキーの箱を出しました。しかし、その場に集まっていた学生は15人でした。このままだと5人の学生に行きわたらなくなります。どうすれば公平に分配できるでしょうか。クッキーがほしい人に手を挙げてもらって、その人に配ればいいじゃないか、と思われるかもしれません。しかし仮に全員が手を挙げたらどうすべきでしょうか。どういう人に優先的に配るのが正しいのか、いろいろな答えが考えられますね。思いつくままに挙げてみましょう。

① 試験の成績のよい順に配っていく。

これは一種の能力主義です。分配する側からすれば単純明快な方法ですが、そもそも試験はその授業の理解度を測るためのものであって、それがクッキーの分配にまで影響しては、学生としてはたまらないでしょう。たとえば学校の成績のいい順にワクチン接種を受けられるとしたらどうですか。学校の成績でワクチンの順番が決まるなんておかしい、という声がきっと上がることでしょう。

② お腹がすいている人に優先的に配る。

誰がお腹がすいているか、は自己申告でしか分からないので、不確かな部分が残りますが、方向性としては正しいように思います。お昼を食べていないとか、朝食を抜いてきた、と言った人は、クッキーを必要としている人、と考えられますので、その人に優先的に配るとするのは正しい配り方でしょう。手術の順番を決める場合は、すぐに手術をしないと命が危ないという人を優先するのが正しい決め方ですが、それと同じことです。

③ オークションを開催する。

これだと、クッキーが欲しい人に、あげるのではなくて買わせることになります。本当に欲しいかどうか、いくらお金を出すかで分かるので、自己申告よりも必要性が分かりやすく表明されます。高額の提示をした人から順に配っていくわけです。「お土産を配る」という例だとおかしな感じがしますし、金持ち優先になってしまうので良くないと思うのですが、資源の分配問題を経済学的に考えようとする人たちは、意外にこの路線で考えていることが多いのです。

④ どう配っても不公平になるから、学生にあげるのをやめて持ち帰って自分で食べる。

確かにこれだと公平・不公平の問題は避けられますが、学生にとっては一度クッキーを見せられたのに誰ももらえないというのは空しい話でしょう。しかしこれは現実には存在する選択肢なのです。

東日本大震災のときにこんなニュースがありました。避難所に毛布が送られてきましたが、その数が避難者の数よりも少なかったため、行政が「不公平」を恐れて誰にも毛布を配らなかったというのです。これでは誰も幸せになれず、せつかくの資源を無駄にしてしまったとしか言えないでしょう。

これら以外にも、昔からある分配形式に「くじ引き」があります。これはじゃんけんでもよく、運に任せるやり方です。このように、分配の公平さの基準はいろいろあるということが分かったかと思います。

さて、この話には続きがあります。よりよい分配基準はないかと学生に質問したところ、意外な答えを出した人がいました。

⑤ 先生がもう一度旅行をして、お土産をもう1箱（10個）買ってくる。

これはすごい答えですね。クッキーが10個だから全員に配れないのであって、20個なら全員に行きわたるわけです。そのためにもう一度旅行するのは大変なので、とんでもない答えだとその時は思いました。しかしよく考えると、わたしたちの社会はこれまで分配における公平性の問題をこの方法で回避してきたことに気づきました。

全員に資源を配れないならば追加で外から調達してくればいい。国内になれば海外に行って取ってくればいい。農地が足りないならば開墾すればいい。それでも足りないなら他国の土地を征服すればいい。埋立地がいっぱいになったら、他の海岸を埋め立てればいい。先進国で捨てられなくなったら途上国に持って行って捨てればいい。こうやって、資源の分配、土地の分配、廃棄物排出量の分配をどうすれば公平にできるかという問題を回避してきたのです。

しかしこれは、資源や土地が無限にあるということを前提としています。地球の有限性を考えるならば、このようなやり方はもう通用しないはずです。

出典：吉永明弘「はじめて学ぶ環境倫理」、ちくまプリマー新書、2021年

(出題に際して、原文を一部省略および改変している。)

問1. この文章を160字から200字で要約しなさい。

問2. 波線部の空欄部分（A）には、すでに廃止された発電所を含め、日本国内でこれまでに運転されてきた原子力発電所の立地基数が多い上位3都道府県名が記されている。このことを踏まえ、著者が波線部のような状態を環境正義に反すると考える理由を、本文で主張される正義の意味を念頭に置き200字から240字で論じなさい。その際、「福島第一原発」「地方」「大都市圏」「便益」「環境汚染リスクの分配」という用語をすべて使いなさい。また、各用語を使用した箇所に下線を引きなさい。

問3. 原子力発電所は運転にともなって放射性廃棄物を生み出す。中でも核燃料由来の「高レベル放射性廃棄物」は、人体に影響を及ぼさない放射線量の水準になるまでに、10万年もの年月を要する。そのため、高レベル放射性廃棄物を地下300メートルより深い地層に埋めて処分すること（これを「最終処分」という）が検討されている。しかし、日本国内で最終処分をおこなう施設（以下「最終処分場」）の立地場所はいまだに決まっていない。

そこで、「最終処分場」の立地場所の候補地となる都道府県を、国が数カ所選定する問題を考えている。この問題は多くの人が立地を望まないような施設を、どのように分配することが公平か考える問題として捉えることもできる。いま、本文中に示されたクッキーのような「多くの人が欲するもの」を公平に分配するための方法である①から⑤を、最終処分場の候補地選定に適用しよう。ただし、多くの人にとって「放射性廃棄物」の価値は「クッキー」とは真逆であるため①から⑤を適切に書き換える必要がある。

元の問題における分配される物の価値とその分配方法との対応関係を正確にふまえた上で、①から③については、(a)「分配方法の基本的な考え方」、(b)「(a)を踏まえた具体的な分配方法」、(c)「(b)の分配方法で選ばれる都道府県の例（一つでよい）およびその理由」の3点を100字から160字で記述しなさい。また④と⑤については、(b)「具体的な分配方法」、(c)「(b)の分配方法で選ばれる都道府県の例（一つでよい）およびその理由」の2点を50字から80字で記述しなさい。

ただし(c)については「選ばれる都道府県がない」もしくは「どの都道府県が選ばれるか想定しづらい」と考えられる場合、その旨を理由とともに述べなさい。

なお、この問題を簡単化するために、以下の条件を設ける（この条件は必ずしも現実を反映したものではない）。

- あくまで建設地となる都道府県を選定するのであり、具体的な市町村までは特定しない。
- 技術的にはどこにでも最終処分場を建設することが可能である。
- 最終処分場の建設費用や放射性廃棄物の搬入にかかるコストは立地場所に関わらず等しい。
- 最終処分場から放射性物質が漏出するリスクは立地場所に関わらず等しい。
- 最終処分場の建設にともなう経済効果はない。